

## 編集後記

社研の年報をお届けします。ほぼ毎月発行の月報と併せて、実に多くの所員等から1年間御投稿頂き、有り難うございます。

我々編集スタッフも、月報の編集後記に関しては可能な限り、投稿論文に沿ってコメントをするように心掛けてきました。もちろんほとんどが専門外の場合が多く、投稿者が100パーセント満足できるものだったかどうかは、自信はありません。しかし、所員間の「かかわりあい」「つながり」に多少寄与できたかも知れません。

最近ふと考えることがあります。社会科学といった大きな枠のなか、50年近く前に提示されたトーマス・クーンのパラダイムにあたるものが出現するのか（既に出現している?）。本年報中（川口雅正・森宏）で指摘された「科学的経験に基づく理論的仮説の検証」の作業が、

グローバル化が進む現在こそ重要な仕事の一つかも知れません。フィールド科学と称して出歩いている小生にとって、若い頃に没頭した「行動科学」がなぜか妙に懐かしい昨今です。

最後に早稲田大学には現在60を超える地域研究所があり、世界から情報を発信しています。まさに「世界のWASEDA」。一方、1975年に創設された国連大学の傘下に「サステイナビリティと平和研究所」が2009年に設立。気候変動や自然災害といったサステイナビリティに関する問題や紛争地域での平和構築などを研究しています。「専大の社研SENDAI SHAKEN」の今後の展開に大いに期待したいところです。今年報に御投稿頂いた論文や、ベトナムなどの実態調査（月報第606/607合併号）は、社研の今後の展開を考えるのに良い材料かと考えています。（福島義和）

---

編集スタッフ	福島 義和（文学部）	内藤 光博（法学部）
	前田 和實（商学部）	新田 滋（経済学部）

---